

長野県に初発した野兎病

昭和31年8月20日受付(特別掲載)

上田病院
遠藤輝男大原総合病院
大原晋一郎

長野県下に初めて野兎病2例発生したのでここに報告する。

症例1. 塩沢某, 22才, 長野県埴科郡中之条村, 農夫。

昭和29年10月13日近くの山中で稀にみる大きさの茶色斃死野兎を友人2人で拾い, これを料理して食べた。その後5日目より悪寒戦慄と共に発熱し, 腰痛・関節痛・頭痛・全身倦怠感及食思不振を訴え, 第4病日には左右肘及腋窩部が腫れてきたので同月24日上田病院を訪れた。

現症及経過: 体格・栄養共に中等の男子で右腋窩リンパ節は鴉卵大, 右肘リンパ節は10×4cm, 左肘リンパ節は12×5cmに腫脹し, 自然痛及圧痛がある。直に入院させ先づペニシリン総量240万単位を注射したが奏効せず, 病歴から考え野兎病を疑って皮内反応を行った。使用抗原は大原研究室作製のもので, その0.05ccを前腕皮内に注射したが, 24時間発赤23×13mm, 硬結8×7mm, 48時間発赤14×14mm, 硬結6×7mm, で明らかに強陽性を示した。又患者血清の野兎病凝集反応は10倍陽性であった。

以上の免疫学的検査によつて本病が野兎病であることが明らかなので, 直にストレプトマイシン療法を行い9g使用したが肘リンパ節の腫脹が軽減しないので, 第25病日に該部を切開して排膿を計った。その後治療迄に22日間を要した。尚経過中行つた諸検査は次の様である。尿; 比重1012, ウロビリノーゲン陽性, 肝機能; 高田氏反応グロス反応共に陰性, モイレングラハト4単位。

症例2. 中島某, 34才は同村の農夫で, 症例1と共にその野兎を料理し食べたという。その後4日目に悪寒・発熱・関節痛あり, 左腋窩及肘リンパ節が腫脹してきたので, 10月24日上田病院を訪れている。

現症及経過: 患者は発熱もなく唯全身倦怠感を訴えている。左腋窩は, 初め湯呑茶碗大に腫れていたというが, 初診時には示指頭大のリンパ節を触れ, 同側肘部にも小指頭大のものを硬く触れた。

野兎病皮内反応は24時間発赤27×25mm, 硬結9×7mmで明らかな陽性を示した。血清凝集反応は病日の関係が陰性であった。第10病日の白血球は8850で,

尿所見に異常なかつた。一般症状が軽微なので何も加療しなかつたが, 爾後飲酒後に不明の熱に悩されるという。

考按並に総括

野兎病は大原八郎^①によつて発見されて以来福島県を始めとして主として関東北に風土病的な局地性をもつて発生している。しかし最近各地で散発的な症例が報告されている。

例えば愛知県に於ける長屋^②の報告とか, 新潟県下の伊藤^③の報告, 佐渡に於ける大鶴^④らの報告である。

本県下の発生についても以上2例以外の報告をみないので, 流行地とは隔絶した地域に於ける散発症例であろう。

これらの症例の感染源は明らかに斃死野兎であるが, 当県の野兎間に本病の流行があるか否か, 偶々一匹の病獣がこの地方にまぎれこんだのか, 鳥類によつて有毒ダニとか病獣死骸が運れてきたものかなどその感染経路については一切が不明である。或いはこの地方に古くから本病が存在しており, 皮内反応によつて今回摘発されたものかも知れない。

当県を始め未流行地の疫学究明に必要な痛感するので, ここに長野県最初の野兎病発生を臨床並に免疫学的に証明したことを報告して, 大方の注意を喚起したい。

丸田教授の御校閲を深謝する。

文 献

- ①大原八郎; 野兎病, 医学総攬, 1巻, 金原商店, 昭19.
②長屋重明; 野兎病の一例(愛知県下の発生), 臨床内科小児科, 8, 194, 昭28. ③伊藤照雄; 新潟県に於ける最初の野兎病症例について, 診療室, 8, 46, 昭31.
④大鶴正満他; 佐渡の野兎病, 日本医事新報, 1683, 昭31.

Two Cases of YATO-BYO, Tularemia,
First Reported in Nagano Prefecture

Teruo Endo

(Ueda Hospital, Nagano Pref.)

Shoichiro Ohara

(Ohara General Hospital, Fukushima Pref)

Two cases of Yato-byo, tularemia were reported, which were probably first found in Nagano Prefecture. The patients were 22 and 34 year old farmer respectively. As well known, this is an endemic disease in Tohoku and Kanto districts, but recently

it has been reported sporadically in various districts of the country.

The route of infection is not clear in these cases reported in this paper, but it may be of clinical significance to pay attention to the possibility of occurrence of this disease even in non-endemic districts such as this prefecture.

7頁、石井次男、福沢芳章の論文中、英文抄録が印刷
洩れになりましたので深くお詫びいたし、之を挿
入致します。

Present Status of Anesthesia for
Curettage (Artificial Interruption
of the Early Pregnancy) in
Nagano Prefecture

Tsugio Ishii and Yoshiaki Fukuzawa
Department of Obstetrics & Gynecology, Faculty
of Medicine, shinshu University
(Director: Prof. S. Iwai)

The answers from 102 gynecologists in Nagano Prefecture to the inquiries about the anesthesia for curettage were summarized.

The result revealed as follows:

no-anesthesia 41%, anesthesia 33%, anesthesia by means of subcutaneous injection of analgesics 32%, infiltration anesthesia 20%, inhalation anesthesia 15%, spinal anesthesia 0%.

When it was compared with the statistics reported by the Japanese Obstetrical and Gynecological Society in 1950, intravenous anesthesia as well as inhalation anesthesia has considerably increased. But curettage without anesthesia has also relatively increased.

The result of "Opiroto" (HCl-Hydrocotarnin) injection for curettage was also reported in this paper.

編集委員

赤羽 治郎 田崎 忠勝 鈴木 篤郎
山田 尚達 岩月 賢一 加藤 英夫

編集後記

○本誌は発行も軌道に乗り、購読会員の数も本年に入つて著しく増しているとの事で、5年目にしてやつと確実な基礎がきずかれた感じである。

○本誌5巻1～4号に発表された原著数54篇、1篇の平均頁数を計算して見たら4.2頁であつた。之を本年度の他誌のそれと比べて見ると、手元にある某大学機関誌では1論文平均9.4頁、某学会雑誌では11.0頁であつて、本誌の論文は断然短い。

○近頃再び論文を長くする傾向があり、これには相当の理由のある場合もある事だろうが、概して歓迎すべき傾向ではない。論文はなるべく短かく仕上げるのが上手な書き方と云うべきである。本誌掲載論文にこの様な冗長化の傾向の全く見られないのは、寄稿者諸氏の良識に依るもので、本誌の為大変よろこばしい事だと思ふ。(S)

信州医学雑誌 第5巻 第5号

昭和31年8月25日印刷

昭和31年9月1日発行

発行所 長野県医学会
松本市旭町信州大学医学部内

編集者兼発行者 佐藤 武雄

印刷所 有限会社 成進社印刷所
松本市向島町九〇〇
電話(松本)2301番